

高齢者のソーシャル・サポート — 主観的幸福感・自尊感情との関連から —

中 島 千 織

【問題と目的】

歴史的にも国際的にも高齢社会となっている現在において、高齢者がいかに上手く、よりよく、充実した暮らしを送ることができるか否かは、第一には本人によるが、高齢になればなるほど他者による支えの重要性がましてくるのは確かであると言われている（高橋・波多野, 1990）。高齢者に対する支援を扱った研究の中で、ここ最近取り上げられてきているのが、周囲との対人関係であるソーシャル・ネットワークや、その中での支援のやりとりであるソーシャル・サポートである。

これまでのソーシャル・サポートと高齢者の適応との関連を検討した研究においては、周囲からの支えが悲しみからの立ち直りや主観的幸福感と関連していることが示されている（河合, 1990；前田ら, 1981）。また、何人かの研究者が、ネットワークやサポートが主観的幸福感に大きな影響を及ぼすことを指摘している（前田ら, 1989；野口, 1991；など）。

そもそも、ソーシャル・サポートという概念は、相互作用的な関係を前提にしていると考えられる（Norbeck, 1987）が、これまでの研究においては、高齢者に向けて与えられる支援のみを扱った研究がほとんどであった。実際に、老年期における（高齢者からの）支援の提供は、年齢が高くなるにつれて少なくなるともいわれている（Antonucciら, 1987；Hess-Biber, 1984 など）。しかし、老親から成人子世代への何らかの提供は続くことも指摘されており（田畑ら, 1997；Zarit & Eggebeen, 1995）、提供する相手や内容に変化は見られるとしても、「周囲に対してしてあげること」が、全くなくなってしまうとは考えにくい。

また、浦（1992）は「支援を受けることが高齢者の精神的健康について負の影響を持つ」という指摘をしており、また Langer（1983）は、老人ホームの高齢者への面接から、他の人々と比べ劣っていると言うレッテルを貼られたり、何から何まで世話をされることで自尊心を低下させると指摘している。Eriksonら（1988, 訳：1990）は、80歳以上の高齢者への面接から、高齢者における支援の提供による独立独行の気持ちと、受領による無力感との間にある葛藤の存在について示唆している。これらのことから、ソーシャル・サポートの持つ提供と受領の両側面が持つ意味を考慮する必要があるのではな

いかと考えられる。

では、ここで示されているような支援の受領と提供は、実際には、高齢者の自尊心や適応とどのように関連していると考えられるのであろうか。河合ら（1990）は、老年期における家族との関係性の尺度を用いて、高齢者が「家族からの依存」をある程度高く認識していることを明らかにしており、高齢者が周囲からの依存を意識していることを示唆している。波多野（1990）は、学習能力に関する言及の中で、環境に影響を与えることが、効力感や competence につながると述べている。また、Eriksonら（1988, 訳：1990）は、面接の結果から、「与えること」が、高齢者の精神的健康と関連する可能性を示唆している。この点に関しては、やりとりと鬱状態との関連をとりあげた Stoller（1985）も指摘しているところである。これらのことから、高齢者からの支援の「提供」が支援の「受領」と同様に、高齢者の精神的健康と何らかの形で関連している可能性があると考えられるのではないだろうか。

そこで今回は、高齢者にとって有効な支援について検討するため、高齢者が支援を「提供」することを含めた双方向的・相互作用的な視点からソーシャル・サポートを取り上げ、それらがどのように行われ、高齢者の主観的幸福感や自尊感情とどのように関連しているのかについて検討する。

【研究Ⅰ】

<目的>高齢者とそれをとりまくソーシャル・ネットワークの中で、双方向的な支援の授受が、高齢者自身にどのように認識されているのかを明らかにし、そのような認識が、主観的幸福感・自尊感情とどのように関連するのかを検討することを目的とする。

<方法>名古屋市内の65歳以上の男女を対象に（男性：30名、女性：64名、計94名、1対1の個別面接による聞き取り調査をおこなった。面接時間は個人により異なり、20分から3時間であった。平均年齢は75.0歳で、男性72.5歳、女性76.5歳であった。

<尺度構成>① Face Sheet, ② 主観的幸福感尺度（Lawton, 1975；（訳）前田ら, 1989；改訂版17項目：2～4件法）、③ 自尊感情尺度（Rosenberg（1965）をもとに、小嶋（1997）、山本ら（1982）などを参考に、高齢者に理解・回答しやすいように修正を加えた10項目4件

法), ④ソーシャル・サポート尺度 (agent をあげてもらい, 各 agent に対する回答をそれぞれ求める: 行動面13項目/依存面8項目, 3件法), ⑤支援全体の「提供」と「受領」が十分であるかどうか, ⑥他者からの依存に対する認識, ⑦ソーシャル・サポート全体に対する認識, ⑧⑨でたずねたソーシャル・サポートの現状に対する理由づけ, について回答を求めた。

〈結果と考察〉世帯構成, agent の有無や種類の違いと主観的幸福感・自尊感情との間には関連がみられなかった。支援の「提供」については, ほとんどの高齢者が肯定的にとらえていることが明らかになった。また, ソーシャル・サポートの行動面と依存面との両関係を合わせた SS の関係において, 少なくともどちらか一方においても「与える」方が多い関係を持つ場合には, どちらにおいても「与える」方が多い関係を持たない場合よりも, 主観的幸福感・自尊感情ともに高かった。さらに, 男性では「受領」が不足であると回答した群が, 十分であると回答した群よりも自尊感情が高く, 女性においては, 「提供」において十分であると回答した群が, 不足であると回答した群よりも自尊感情が高かった。これらのことから, 支援の「受領」と同様に支援の「提供」も, 高齢者の主観的幸福感や自尊感情と関連を持つ可能性が示唆されたといえよう。

さらにサポートの授受全体に対する認識の違いにおいては主観的幸福感や自尊感情に差はみられなかったが, サポートの授受全体に対する認識に関する理由づけは質的に様々であり, 群分けして検討した結果, 主観的幸福感において得点の異なる傾向がみられた。これらのことから, 高齢者のおかれている現状そのものではなく, むしろ個人個人の持つ特性や個人個人の望んでいる対人関係が関連しているのではないかと推測できる。

【研究Ⅱ】

〈目的〉個人個人の望むソーシャル・サポートと現実のソーシャル・サポートとのギャップによって生じると考えられる, 対人関係における不満や葛藤に焦点をあて, 主観的幸福感・自尊感情との関連を検討することを第1の目的とする。また, 研究Ⅰにおいては informal なサポートについてのみ取り上げたが, 面接内での言及において

親しい agent 以外への提供も多く述べられていたことから formal な場面における「提供」についても検討することが必要であると考えられる。そこで, formal な場面での支援の「提供」と主観的幸福感・自尊感情との関連を検討することを第2の目的とする。

〈方法〉名古屋市内の教育・福祉施設を利用している65歳以上の男女34名 (男性:15名, 女性:19名) に対して, 1対1の個別面接形式で行われた。面接時間は個人によって異なり, 20分から1時間程度であった。平均年齢は, 74.7歳で, 男性71.7歳, 女性77.0歳であった。

〈尺度構成〉① Face Sheet, ②主観的幸福感尺度, ③自尊感情尺度 (①~③: 研究Ⅰと同様), ④対人関係内における不満や葛藤の有無とその対処について, ⑤社会的役割の有無 (役員経験・教授経験), について回答を求めた。

〈結果と考察〉対人関係における不満や葛藤について, 不満のない群が主観的幸福感・自尊感情が最も高く, 次いで自己解決・肯定群, 不満持続群の順であった。今回は人数が少なかったことから統計的な処理は行わなかったが対人関係における不満が主観的幸福感や自尊感情得点と関連する可能性があるかと推測される。「社会的役割」の有無について, 2群間で検定を実施したところ, 役割あり群の方が役割なし群よりも主観的幸福感・自尊感情が高い傾向がみられた。これらの結果から, 高齢者が支援を「提供」することが, 高齢者の適応と何らかの形で関連している可能性が示唆されたといえよう。

【総合的考察】

今回の調査においては, ほとんどの高齢者にとって支援を「提供」することが望ましいことであると認識されていることが示され, またその「提供」が formal/informal を問わず高齢者の主観的幸福感や自尊感情と関連する可能性が示唆された。しかし, 今回は個人特性やソーシャル・サポートにおけるどのような要因が関連しているのかについては検討していない。今後, 個人にとって有効な支援を検討していくために, 個人の特性やソーシャル・サポートの中に含まれる要因についても取り上げ, 高齢者の適応との関連について検討していく必要があると考えられる。